



5.23 明治公園に結集した五万余の部落大衆、労働者人民 (報告4面)

われわれが今号で発表する「四全総・政治報告」に鮮明に提起している結党以来の闘いの中で、第一次・第二次ブントを貫く反スタ・トロツキズム、急進民主主義の清算を推し進め、とりわけ部落解放運動における党指導の決定的敗北の自己批判から「党の転換」をなし切り、眞のマルクス・レーニン主義の革命党へ転換するために、一切の努力を傾注して

全国の同志、友人諸君！
われわれは、五月、第四回全国同盟総会に戦取し、綱領を獲得し、規約を再確立することを通してブント総括のかなめをつかみ、分派から統合への長征を開始し、プロレタリア単一党創建に大胆に着手したことここに宣言する。

きた。そして四全総をまさしく「党の転換の勝利を宣言する」ものとして闘いとなり、攻勢的党建設への号砲としたのである。われわれが『遊撃』五四一五五合併

号で提起したブントの革命的再生についての統合のための六条件は、このようなわれわれの苦闘の一つの帰結である。まさに、この闘いは、この間の共産同

三。プロレタリア単一党創建に向けたわれわれの闘い

革命の旗

共産主義者同盟政治機関紙

第57号

(創刊準備号)
1979.6.20

定価 200円

晋社区局号 沢田便4
北游都世郵箱0-195783
人所 東千私東京(開封・送料共)
行行連發 替振 10回2000円(密封・送料共)晋社区局号 沢田便4
北游都世郵箱0-195783
人所 東千私東京(開封・送料共)
行行連發 替振 10回2000円(密封・送料共)

東京サミットを粉碎せよ

戦争と革命の時代におけるプロレタリアートの進撃をかちとれ

今日、世界は、米ソ超大国の覇権争奪の激化、反帝民族解放闘争の前進を基調として、三たび戦争と革命の時代を

迎えようとしている。絶対的覇者から相対的強者へ転落した米帝は、しかし暴力的な世界再編を策し、ソ連との覇権争奪第三次世界大戦の布陣の形成を露骨にすすめ、日帝は、これに密着しつつ、アジアでの侵略反革命、独自の権益の確保に拍車をかけている。東京サミット

第五回先進国首脳会議こそは、こうした時代基調を決する歴史的な結節点である。われわれは、今こそこの東京サミットに對し、反帝反社帝反覇権、侵略反革命粉碎の国際路線と、日帝打倒・米帝追放、南北問題のテーマの下に、①エネルギー・資源、②生産性、エネルギー開発、市場開放など中・長期的なPAP（積極的調整政策）の確立があげられている。過去四回のサミットがそうであったように、否それ以

上に、帝国主義の危機の深化は、帝国主義間矛盾を激化させ、PAPの確立などは絶対である。だが今、東京サミットはそれのみに終わるものではない。英帝サッチャード

C.ジエギングスが、「をきわめてエネルギー問題の重視をあげ、外相園田もIEA閣僚理事会において、「（イラク政変、スリーマイル島原発事故にふれたあと）こ

ー問題は極めて深刻な局面を迎つつある。きたるべきOECD閣僚理事会、東京サミットにおいても、エネルギー問題

が最も主要な課題のひとつとなることに疑いを入れない」と述べているように、

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

六月東京サミットに予定されている主要議題は、経済・貿易・通貨、エネルギー・南北問題のテーマの下に、①エネルギーへのどう喝と威かくをもつて自己の

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

六月東京サミットに予定されている主要議題は、経済・貿易・通貨、エネルギー・南北問題のテーマの下に、①エネルギーへのどう喝と威かくをもつて自己の

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

今日、世界は、米ソ超大国の覇権争奪の激化、反帝民族解放闘争の前進を基調として、三たび戦争と革命の時代を

迎えようとしている。絶対的覇者から相対的強者へ転落した米帝は、しかし暴力的な世界再編を策し、ソ連との覇権争奪第三次世界大戦の布陣の形成を露骨にすすめ、日帝は、これに密着しつつ、アジアでの侵略反革命、独自の権益の確保に拍車をかけている。東京サミット

が最も主要な課題のひとつとなることに疑いを入れない」と述べているように、

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

今日、世界は、米ソ超大国の覇権争奪の激化、反帝民族解放闘争の前進を基調として、三たび戦争と革命の時代を

迎えようとしている。絶対的覇者から相対的強者へ転落した米帝は、しかし暴力的な世界再編を策し、ソ連との覇権争奪第三次世界大戦の布陣の形成を露骨にすすめ、日帝は、これに密着しつつ、アジアでの侵略反革命、独自の権益の確

保に拍車をかけている。東京サミットが最も主要な課題のひとつとなることに疑いを入れない」と述べているように、

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

今日、世界は、米ソ超大国の覇権争奪の激化、反帝民族解放闘争の前進を基調として、三たび戦争と革命の時代を

迎えようとしている。絶対的覇者から相対的強者へ転落した米帝は、しかし暴力的な世界再編を策し、ソ連との覇権争奪第三次世界大戦の布陣の形成を露骨にすすめ、日帝は、これに密着しつつ、アジアでの侵略反革命、独自の権益の確

保に拍車をかけている。東京サミットが最も主要な課題のひとつとなることに疑いを入れない」と述べているように、

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

今日、世界は、米ソ超大国の覇権争奪の激化、反帝民族解放闘争の前進を基調として、三たび戦争と革命の時代を

迎えようとしている。絶対的覇者から相対的強者へ転落した米帝は、しかし暴力的な世界再編を策し、ソ連との覇権争奪第三次世界大戦の布陣の形成を露骨にすすめ、日帝は、これに密着しつつ、アジアでの侵略反革命、独自の権益の確

保に拍車をかけている。東京サミットが最も主要な課題のひとつとなることに疑いを入れない」と述べているように、

一方ソ連帝は、キューバ、ベトナムを手先にアフリカ、アジアで自らの勢力圏の確立に金力をあげ、社会主義の仮面の

今日、世界は、米

プロ単一党を創建せよ

(三面より続く)

れていたのである。この総蜂起路線の由核を占めている「プロレタリアートの独自性」とは何か、何ではマルクスが述べた革命党が根本的に依拠すべきプロレタリアートの階級基礎の問題や、あるいは「支配階級へと自らを高めあげていく」労働者階級の歴史的基本任務と異なつて、総蜂起路線には、資本主義批判の基本的着眼点が正しくそえていない。すなはちプロレタリアートが、資本主義的生産諸条件はいかに準備されているのか、革命的政治路線には、まずこのことが中心にいかなる役割を果さなければならぬのか、また社会主義を実現すべき物質的問題となるなければならないし、ましてやプロレタリアートの独自性を明らかにし、現下の社会的条件下においてこの任務を明らかにする上では当然の見地である。帝国主義の結果としての侵略反革命（戦争）や、排外主義に対置される、「プロレタリアートの独自性（独自任務）」であるならば、いかに戦術的に突出しても、「革命潮流の左派」に依拠すると称しても急進民主主義に転落する以外にないものである。しかし、もちろんだが、これは排外主義批判や、侵略反革命等の帝国主義の「特徴」について不間にすることではない。現下の帝国主義の發展の中に、プロレタリアートの反抗の増大の性格を捉え、さらに独占資本のもとに抑圧され搾取されている勤労人民との階級的相互関係を正しく把握し、これを基礎に、國家権力および政府との關係を明らかにすることが原則とならなければならぬことは、うことである。プロブルの階級対立に党的立脚点を置くといふのは、そういう反対する民主主義闘争のみプロレタリアートと党的任務を解消する」とはできないことである。プロブルの階級対立の立脚点を置くといふのは、そういうふうのことであつて、侵略反革命（戦争）ではない。資本の支配と経済的隸属の実体をして明確にしなければならない。このことをプロレタリアートの自覚と組織的実現しなければならないこと、こうした観点をプロレタリアートの独自の任務として明確にしなければならない。このことのためには、ブルジョア階級の支配道具である国家権力を粉碎して社会主義を実現しなければならないこと、これをやり切るためにには、いまでもなく党の宣伝、煽動、組織に媒介されなければならぬのはもろろんのこと、これをして獲得するためには、いうまでもなく、生的な資本主義批判、ブルジョア独裁に

対する反抗の只中に入り、われわれ自身が闘わなければならぬ。こうした原的觀点を忘れて排外主義指導部との分だけを強調する總蜂起路線を、われわれ同盟) とりわけ、米帝の軍事基地の国内に於ける、日帝の一定の國家的従属を認め、この関係が、日米安保体制(反革命軍事同盟) といふ。

この時点で提起された党的基本任務次の二点である。すなわち第一に、党旗艦を鮮明にすること、すなわち、わ

同盟の苦闘史からいえば、党建設の第

一期であるが、階級闘争全体における单

党建設の歴史任務からすれば、それは第一期の党建設のための闘いが基礎にな

っていること、このことを明確にした。こ

して第一に、反スタ・トロツキズム、こ

進民主主義の全面的の一掃である。すな

ち、わが同盟の大方向を決定していく基

礎として、党の転換をアントの再生へ、

おしひろげていくこと、その綱領的核心として、反スタ・トロツキズム批判が

返す力で、当面するわれわれの課題を

しむるべ、解決していくという手法をと

つたのである。反スタ・トロツキズム、

急進民主主義批判は、「要をつかんで、へ

体を把握する」基本的な指標となつたのである。

わが同盟がこの間獲得してきた急進

主義清算の地平は「国家・政府および

諸階級」の分析の上に、階級相互間の丁

しい関係を捉え、敵が誰で味方は誰か、

誰と団結し、誰と闘うのかを明らかにす

ることであった。それは他でもなくブレ

タリアートについての国家権力の問題

をマルクス・レーニン主義の見地から明

らかにする」とである。

まさしく、かかる見地に立つて日本革

命の性格とその国家権力の問題を質的的に分析する) ことによって、日米安保体制の位置を明らかにし、米帝退散のスローガンを獲得するに至つたのである。これは、反スタ・トロツキズム清算の成果の一つである。なぜなら、第一次ブントに

來の「日帝自立論」が、日共との派分過

程において提起されたトロツキズムの経済主義であったことを総括し、米帝に対する、日帝の一走の国家的従属を認め、

3 同盟四

全総戦取に向かへ

トが打倒し、獲得すべき国家権力の間接的掌握が彼岸化されているのである。

に基本任務

しそれ自身としては、マルクス・レーニン主義の党を建設し、社会主義の大道自らを押し上げるまでには至らなかつた。われわれのこれまでの総括は、このよくなブントの限界を打破し、眞の前衛党建への突破口を切り拓く基本的な条件である。急進民主主義の清算は、党活動的基本内容を社会主義に結びつけるため最低の条件であつて、このうえにこそロレタリア階級の大多数をひきつけることができるのである。

レーニン主義の綱領

を鮮明にし、国内外にわたる情勢の基的見地の中から労働者階級人民の進むべき道を明らかにするものである。

われわれは、この間の“党的転換”を通じて、自らの急進民主主義、反スターロツキズム清算の闘いを推し進めてきたが、同時にこうした活動は返刃されて日の階級闘争と前衛党の不在による混迷した指導問題に、結着をつけることになり尽してきた。すなわち綱領・規約・政治路線の基本的觀点を確立することによって階級闘争の現状に一走の基礎をえたことである。とりわけブントの分裂的状態に正しい指標を提起することは緊要な任務である。レーニンは、うした段階における綱領の意義を、ようやく述べている。“論戦が無益なるものにどまつたり、個人的な言いあいに陥り、見解の混乱に導いたり、敵味方の混同に導いたりしないようにするためで、同時にブントの單一党創建への土壌と演壇をつくり出してきたといえる。うまでもなく、このなかでわれわれがどう標としておしだしてきたものは、反スターロツキズム、急進民主主義の清算である。ブントの二〇年間を総括し、なか

綱領草案

社会主義のための基本活動は、社会的・経済的・政治的内容を宣傳し、その社会・経済体制、その原則との対立する労働者階級に対する労働者階級の相互関係について、またこの闘争におけるプロレタリアの役割について、また没落しつつある階級に対する、資本主義の過去と未来の理解を労働者階級の中に広めることである。そしてこうした宣伝と不可分の爆動を大胆にもちこまなければならぬのは、資本主義の最高の発展段階である現代の帝国主義の政治的条件と階級の争および労働者大衆の発達水準に適つて、労働者の闘争の全ての自然発生的な現われ、すなわち経済闘争、改良闘争などである。

をはじめとする労働者と資本家の今後の衝突に参加し、こうした闘いを実際一定式化し、労働者のうちに自分たる帶性と團結の意識をつくりだし、ピタリアートの世界軍の一郎隊として労働者の共通の利害と共通の事業による意識を発達させることである。マス・レーニン主義の党にとって、これまでの行動は実際に確立されなければならない。ところが、トロツキズムにしては第一次ブントは、かかる常伝・煽動を基本とした社会主義活動現することができず、権力との攻防に目を奪われ、労働者大衆の大多數にたちあがらせて闘うことがでかつた。

行は避けられないことを示すのである。「死滅しつつある資本主義」とはレーニンによって明らかにされたのである。

米帝打倒と結合した米帝追放の任務の確立

われわれは、こうしたレーニン主義に依拠してブントの帝国主義批判の総括をなしてきた。ブントの「戦略戦術の党」が、第二次ブント以来の経済主義にもとづいたものであり、ブントは日帝の自立を「独占資本主義の復活」という経済的土台でだけ分析して論証し、この経済的土台の反映に規定された帝国主義の諸矛盾を正しくとらえることができなかつた。このために、日共修正主義の従属論に対する反転倒におちいり、日帝自立＝プロレタリア社会主義革命、そして「帝国主義である以上、従属はありえない」として不均等発展による帝間矛盾だけを強調することになったのである。すなわちブントの経済決定論的な帝国主義の規定づけにもとづいたアプロレタリア社会主義革命の一面的なとらえ方は、戦後日本帝国主義の独自の發展と資本蓄積構造を見ることができなかつた。日本帝国主義は、五〇年代の朝鮮侵略反革命戦争に加担することにおいて、その特徴景気を蓄積の基礎として復活し、同時に五一年サンフランシスコ条約、日米行政協定にもとづく米帝の極東反革命軍事同盟に支えられたのである。従つて六〇年安保改定以後も米帝の軍隊を国内に駐留させ、戦後一貫して反革命同盟（安保体制）にもとづく極東アジアにおける侵略反革命体制を米帝と共に築いてきた。同時に米帝（軍）の国内駐留は、戦後以来の日本階級闘争の明確な反革命としての役割を担ってきたのである。しかし今日においては、戦後の一時期のように日本人民と米帝との矛盾が主要矛盾なのではなくては、日帝との階級矛盾が支配的であり、こうした全体を正しくつかんで、当面する日本革命の性格を規定づけなければならぬ。

すなわち日本帝国主義の国家権力は、まぎれもなく日本金融独占資本を中心とした資本階級が握つており、ブルジョア階級独裁の支配が貫徹されている。そして米帝との対立と協商をはらみつつ、米帝による日帝の“国家的従属”があり、この関係が日米安保体制として存在して

マルクスレーニン主義の

5

革命に勝利せよ 日帝打倒・米帝追放、プロ独・社会主義

われわれは、第一次ブント以来の、日帝自立論にもとづく一段階のプロレタリア社会主義革命論が、何ら日本革命の権力問題を明らかにすることができず、米帝追放のスローガンを正しく位置づけることができなかつたことを総括してきた。こうした作業は、四全総に至る「党の転換」の内実たる反スタ・トロツキズム、急進民主主義を、政治路線・組織路線の總体におしひろげてきた結果であり、革命の進むべき道をしっかりと打ち固めることになった。

政治路線の確立へ

われわれは、当面する革命の政治路線をかなめとしてつかみ、さらに綱領・規約の背骨の下に、プロレタリア人民に明確な指針を提起しなければならないのである。米帝追放のスローガンは、ブント総括の全体にもとづくものであったが、同時に從来のトロツキズムの綱領・政治路線の基本的誤りが、こうした民主主義的任務、さらには、プロレタリアート以外の階級・労動人民の闘いの政治理格について明確化することができないとも明らかにした。レーニンは、革命の性規定の基本条件を「国家・政府および階級の相互関係」として明らかにしておりが、「階級闘争のすべての現われを指導する」革命党は、プロレタリア階級を指導階級に高めあげるために全階級・階層人民の諸条件について熟知し、この相互関係を社会主義に導く見地でつかまなければならぬ。ブントの急進民主主義は、こうした諸觀点を、日帝打倒に元化することによって、はじめて民族問題、農民問題、被抑圧人民、被差別大衆の各々の独自の性格について何ら明らかにすることはできなかつたといえる。今日の日本では、プロレタリア社会主義革命がその基本性格であるとしても動搖する中間層と、団結すべき労動人民大衆をはつきり分けて「正規の攻撃」の革命的諸条件を形成しなければならない。ましてや被抑圧人民、被差別大衆との団結は、社会主義、共産主義の内実を決する社会革命の核心点であり、これらの解放なく

いる。この軍事同盟は、米帝が日帝をまきこみ、ソ連帝との霸權争奪戦に対するものとしてあると同時に、アジアに向けた侵略反革命同盟である。さらにこの軍事同盟は、日帝の侵略反革命体制を支え、また日本プロレタリア人民の階級闘争にたいする反革命・抑圧体制としての役割と機能をもっている。それゆえ米帝（軍）

として、労働者階級の解放もありえないものである。急進民主主義は、この觀点を欠落した、マルクス・レーニン主義と相

て、国際階級闘争に対する基本的見地をさらに四全総路線は、今日の国内階級闘争の政策路線と不可分一体のものとして、国際階級闘争に対する基本的見地を明らかにしてある。われわれの国際路線は、日本プロレタリア階級・人民が、国際階級闘争の激動に対していかなる態度を示し、これと密接な關係をふまえて、自國の闘いを推進めるのかということにある。従つて、從来の反スタ・トロツキズムの「一国社会主義建設不可能論」の見地から世界党・世界赤軍・世界同時革命の主觀主義的「世界革命戦略」とは無縁であり、あくまでプロレタリア国際主義と自國帝国主義打倒の基本原則にそつたものである。

（一）帝国主義・社会帝国主義と被抑圧民族の間の矛盾
（二）帝国主義と社会帝国主義、および帝国主義相互の矛盾
（三）資本主義国・官僚制国家資本主義の後退と共に戦後の帝国主義の相対的安定期は終った。とくに七五年ベトナム・ラオス・カンボジア人民の反米救国民族解放闘争の勝利は、この事態を一層決定的なものとした。これを契機に帝国主義の時代が「戦争と革命の時代」であることを一層明らかにした。米帝国主義を先頭とした戦後帝国主義支配体制は、各

民族の民族解放闘争、その圧迫的軍事力・経済力を背景として、人民革命を反対し、反帝、反社帝、反霸權のプロレタリア国际主義を掲げ、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の闘いに決起しなければならない。

「一流」であるとはい、日本は明確な帝国主義である。日本プロレタリア階級は、かかる国際階級闘争の基本情勢をふまえ、日帝の侵略反革命と他民族圧迫に反対し、被抑圧民族・人民の革命闘争と連帶し、社会主義人民の闘いを支持し、反帝、反社帝、反霸權のプロレタリア国际主義を掲げ、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の闘いに決起しなければならない。

われわれは、活動報告の全体を貫いて、相対的地位の後退からの失地回復、および東南アジアへの霸權策動を一層強め、相対的地位の後退からの失地回復、そして第二に、国際階級闘争の激化に

対応して登場したソ連社会帝国主義を見

ておねばならない。ソ連帝は、六八年東欧チエコへの武力侵入以降、アフリカ

諸国・中東、そして最近のインド・アフリカ

に對応して登場したソ連社会帝国主義を見

ておねばならない。ソ連帝は、六八年

東欧チエコへの武力侵入以降、アフリカ

諸国・中東、そして

これらの社会関係、社会的生産関係の総体は、社会とよばれるものを、しかも一定の歴史的発展段階における社会を形づくる「個々人がそのうちで生産する社会」關係は、物質的生産手段、生産力が変化し發展するのにつれて、変化・変動する」という経験的に確かめる唯物論的基礎の上に位置づけることによって、現実的諸個人の意向そのものが、特定の社会的生産関係の総体によって、必然的に形成される階級関係として

資本主義的 商品生産

マルクス主義の革命的理論

の総括

（下）

資本主義的 生産関係

と価値法則

（上）

資本主義的 生産関係

の総括

（下）

資本主義的 生産関係

と価値法則

（上）

資本主義的 生産関係

の総括

（下）

資本主義的 生産関係

と価値法則

（上）

資本主義的 生産関係

の総括

（下）

資本主義的 生産関係

と価値法則

（上）

資本主義的 生産関係